

教員養成系学部授業「キャリア教育」における ワーク・ライフ・バランスの取り扱いの検討

—子育て体験実習を取り入れたカリキュラム開発をとおして—

阿部 学¹⁾ 堀江 敦子²⁾ 谷山 大三郎³⁾

敬愛大学国際学部¹⁾ スリール株式会社²⁾ NPO 法人企業教育研究会³⁾

教員養成系学部の授業「キャリア教育」において、ワーク・ライフ・バランスについての理解を深める目的で、子育て体験実習を取り入れるという工夫を取り入れたカリキュラムを開発し、実施した。子育て体験実習は、スリール株式会社が行っている「ワーク&ライフ・インターン」を参考に、大学授業としてアレンジして実施した。授業の結果からは、ワーク・ライフ・バランスやキャリア教育のあり方について、学生それぞれが様々なことを考えたということが示された。また、佐伯(1995)の言う YOU 的なかわりが、学生の学びにとって重要であることも示唆された。

キーワード：キャリア教育、教員養成、ワーク・ライフ・バランス、子育て体験、YOU 的なかわり

1. 研究の背景

1.1. キャリア教育の課題

学校現場におけるキャリア教育の重要性が提唱されるようになって久しいが、2011年の中央教育審議会答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」においては、学校から社会への接続がまだ円滑に行われておらず、「社会的・職業的自立」へ向けて課題がみられ、学校・地域・企業・NPO等のさらなる連携が重要であると指摘されていた。

特に近年、文部科学省(2011a)も「子どもたちが育つ社会環境の変化に加え、産業・経済の構造的変化、雇用の多様化・流動化等は、子どもたち自らの将来のとらえ方にも大きな変化をもたらしている」と述べているように、情報化、グローバル化、少子高齢化などによって、私たちの社会は大きく変化してきた。「社会的・職業的自立」を目指すとしても、移ろいゆく社会の状況をふまえながら、キャリア教育のあり方を探っていかなければならない。

さらに最近では、人工知能(AI)やIoT(Internet of Things)、VR・ARなど先端的なデジタル技術が産業・職業のあり方に様々な影響を与えうるはずだと注目を集めていたり¹⁾、企業の労働環境の問題、待機児童問題

など、これまでの日本社会で当たり前とされてきた働き方・生き方に再考を迫るような話題も頻出していたりする²⁾。

文部科学省(2011a)は「今、子どもたちが「生きる力」を身に付け、社会の激しい変化に流されることなく、それぞれが直面するであろう様々な課題に柔軟かつたくましく対応し、社会人として自立していくことができるようにする教育³⁾が強く求められている」と言うが、そのためには、旧来的な社会像及び職業観・勤労観を想定するのではなく、日進月歩に変わってゆく社会の状況をふまえ、時にそこで生じる現代的課題を取り扱いながら、キャリア教育を実践していくことが必要である。

1.2. 現在行われている実践

しかしながら、「現在の社会のあり方や、そこでの課題を十分に扱えているか?」という観点からキャリア教育の状況を概観すると、課題もみえてくる。

文部科学省(2011a)が出している『小学校キャリア教育の手引き <改訂版>』をみてみよう。実践事例として具体的に学習指導案が挙げられているものには、「私の個性って何だろう」(小6)と、「力を伸ばすための学習って?」(小5)という2つの実践がある。前者は、友人の特徴や自分の個性について考えるという実践である。後者は、「どうすれば力を伸ばすことができるか」をグループで話し合ったり、偉人の話や「心のノート」を確認したりしながら、今後自分が努力しようと思ったことを記していく実践である。

これらは、自己理解や他者理解など、児童の内面の側

Manabu ABE¹⁾, Atsuko HORIE²⁾ and Daizaburo TANIYAMA³⁾: Study on Work-Life Balance in "Career Education" -Development of a Curriculum to Experience Child Rearing-

¹⁾ Faculty of International Studies, Keiai University

²⁾ Sourire Inc.

³⁾ NPO, the Association of Corporation and Education

が重視された実践だと言えよう。一方で、学習指導案を見る限りでは、児童や学校の外側、すなわち現代社会の特徴に触れることはなされていない。これらのような実践にも意義があるのだと思われるが、現在の社会とのつながりという観点からすると、この種の実践を重ねるだけでは、キャリア教育としては不十分であると言える。たとえば、個性の発揮される場や発揮のされ方は、10年前と現在と10年後では、変わっていることが想像される⁴。これらの実践に加え、社会とのつながりを重視した実践のあり方も探っていかなければならない。

社会とのつながりという観点からすると、中学校段階ではより直接的に、職場体験などの試みがなされているはずである。文部科学省(2011b)『中学校キャリア教育の手引き』でも取り上げられている。

しかし、もとより職場体験には課題も指摘されてきている。藤川(2006)は、「職場体験は、言わば子どもたちが「社会を動かす側」に立つ、貴重な機会である」とその意義を認めた上で、「子どもが経験できる業種、職種は限られている」と限界を指摘している。確かに、今や社会の中で重要な役割を担うプログラマーの実務や、実際に働いている者でないと分からない仕事と家庭の両立の難しさなどは、体験することはできないだろう。

次に、高校に目を移し、荒川(2009)による指摘を確認してみたい。荒川は、キャリア教育が推進され、生徒の興味・関心に応じた進路選択すなわち「夢追い」型の進路形成が促された結果として、偏差値中・下位校においてASUC職業を志望する者が増えたということを描いている。ASUCとは、人気(Attractive)・稀少(Scare)・学歴不問(Un Credentialed)の頭文字をとった荒川の造語である。ASUC職業は、その名が示すとおり、職業に就く道筋も曖昧であり、またその職に就ける人自体が限られているものである。結果として、望まずにニートやフリーターになる確率が高くなるという可能性が指摘されている。

「夢追い」が推奨されるものの、その夢を追った先に本当にその夢が叶うのか、飛び込んだ社会の中で職を得られるのか、といったところまでは教師にも誰にも分からないということであろう。夢を追わせること自体は問題ではないが、結局は不確かな社会に生徒を送るしかないというキャリア教育のメカニズムには、一考の余地がある。

1.3. 理論的検討

前節に示されたようなキャリア教育の課題は、佐伯(1995)による「学びのドーナツ論」を借りれば、次のように解することができる。

「学びのドーナツ論」とは、学び手(I)が外界(they)について学んだり、そこに参加していき

したりする際に、Iによりそってくれたり、親しみを感じさせてくれたり、they世界を垣間見させてくれたりするような、二人称的世界(YOU)とのかかわりを經由することが望まれるということを示したモデルである(図1)。

キャリア教育にあてはめて言えば、子ども(I)が社会(they)に接続されようとするとき、社会のことを分かりやすく伝えてくれたり、社会へ誘ってくれたりする教師および大人(YOU)とのかかわりが重要になるということが言える⁵。

その場合、教師(YOU)は、子ども(I)とかかわるだけでなく、社会(they)のことも認識していなければならないと言える。図1でいう第一接面だけでなく、第二接面も重要だということだ。では、教師と社会(they)との関係、すなわち第二接面のあり方は、どうあるべきか。まず基本的に、子どもの内面に対する指導や、子どもによりそうこと自体が目的となり、社会(they)のことを忘れてしまてはいけぬ。また、教師の想定する社会(they)が、現状とはかけはなれた旧来的な社会像ではいけない。社会のあり方は多様であり変化もしているため、一度キャリア教育を行ったからといって、社会(they)のすべてを扱いきれたと思ってもいけない。

キャリア教育を行う教師は、移ろいゆく社会(they)に目を向けたり、それを背負ったりしながら(第二接面)、子ども(I)に向き合っていく(第一接面)必要がある。第一接面だけの指導では、キャリア教育としては不十分である。教師が子どもをthey世界へ誘うという発想は、教育活動全般にわたって重要であるはずだが、社会との接続が主たるねらいとされるキャリア教育においては、この発想は特に重要となるだろう。

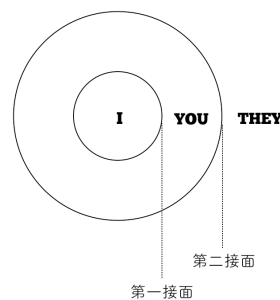


図1 「学びのドーナツ」
佐伯(1995)をもとに筆者作成

2. キャリア教育の担い手をどう育てるか

2.1. 研究の目的と方法

社会の現状をふまえながらキャリア教育を行っていかねばならないという課題に応じる策は、いくつか

考えられる。第一に、モデルとなりうるようなキャリア教育の授業を開発し、提案することである。第二に、ともすれば「学校文化しか知らない」と批判されがちな現職教員が、越境し社会のことを学んでいけるようなシステムをつくり、運用することである。第三に、教員養成の段階において、将来のキャリア教育の担い手となる大学生が、社会の現状を学びつつキャリア教育のあり方について考えることができるような授業を開発し、実施していくことである。

本研究では、第三の可能性について検討をしていく。具体的には、教員養成系学部の授業「キャリア教育」における教育内容・方法の検討およびカリキュラムの開発を試みる。大学生が子どもの頃に受けてきたキャリア教育を学び直すような内容ではなく、今現在の社会の現状に触れ、これからのキャリア教育のあり方を自分たちなりに考えていけるような内容の授業を構想し、実施する。その過程において、取り上げる題材をワーク・ライフ・バランスと設定し、それを取り上げる意義や、どのような手法であればワーク・ライフ・バランスについて学生が理解を深められるかということ考察していく。

2.2. 教員養成系学部における「キャリア教育」の試み

まず、本研究と類似した試みはないか確認してみたい。しかし、そもそも教員養成系学部において、キャリア教育の担い手を育成する目的をもちつつ、現代的課題の扱い方について検討しようとする試みはほとんどない⁶。

そうした中で、千葉大学教育学部では、様々な現代的課題を扱った「キャリア教育」の授業を実施してきている。藤川・塩田(2007)は、企業やNPOと連携したキャリア教育の事例について、外部講師による講義や模擬授業をとおして学ぶカリキュラムを開発している。小池・福嶋・藤川(2013)は、コンピュータ技術の発展やインターネットの普及、特にソーシャルメディアの流行により変化した社会の状況や、そこで生み出されてきた仕事などについて学ぶカリキュラムを開発している。城(2014)は、ワーク・ライフ・バランスについて理解を深めるために、毎回関連する内容に詳しい方をゲスト講師として招き、講義をしてもらうというカリキュラムについて報告している。

現代的課題といっても多様な論点がありうるが、千葉大学教育学部「キャリア教育」では、毎回様々な方法で諸問題を取り上げてきており、それぞれにおいて、学生にとって意義ある授業であったことが示唆されている。

2.3. ワーク・ライフ・バランスとは何か

本研究では、これまでの成果をふまえ、千葉大学教育学部「キャリア教育」を舞台としながら、さらに工夫を加えつつ、次のようなカリキュラム開発に取り組んでみ

たい。それは、近年注目されるワーク・ライフ・バランスをテーマとして、特に仕事と子育ての両立について学べるようなカリキュラムである。

ワーク・ライフ・バランスについて確認しておこう。この語が注目される一つのきっかけとして、2007年の「官民トップ会議」において制定された「仕事と生活の調和(ワーク・ライフ・バランス)憲章」がある⁷。政府主導で推進されてきたという背景もあり、企業等が取り組むべき課題として語られる⁸ことが多いが、最近では企業経営の文脈に限らず、様々な場面で用いられることがある。

この憲章においては、仕事と生活の調和が実現した社会は、「国民一人ひとりがやりがいや充実感を感じながら働き、仕事上の責任を果たすとともに、家庭や地域生活などにおいても、子育て期、中高年期といった人生の各段階に応じて多様な生き方が選択・実現できる社会」であるとされている。より具体的には、経済的な自立が可能で結婚や子育てに対して希望がもてたり、仕事だけでなく家族や友人との時間が確保できたり、子育てや介護が必要な時期でも多様で柔軟な働き方ができたり、性別や年齢による差別がなかったりという社会像が示され、目指されている。

このように、ワーク・ライフ・バランスとして扱われる範囲は多岐にわたるが、小室(2010)は、この言葉が注目される最も大きな要因は、少子化への危機感であると言う。確かに近年、少子化問題と関連して、待機児童問題、保育所建設の問題、父親の子育て参加、女性の働き続けやすい環境づくりなど、子育てをしやすい社会づくりに関する積極的な主張や試みがなされるようになってきている(ファザーリング・ジャパン 2013; 無藤・北野・矢藤 2014; 古市 2015; 出口・駒崎 2016)。もちろん、大人の働き方自体を改善しようとする試み(駒崎 2009; 小室 2010)も、間接的に子育て問題の解決にかかわってくるだろう。

こうした問題はすぐに解決できる類のものではないが、むしろ、だからこそ、現在の私たちの社会の重要な課題として注目を集めているのだろう。子育てに関する問題、ひいてはワーク・ライフ・バランスについて理解を深めておくことは、現代人のキャリアを考える上で、重要なことだと言える。

2.4. ワーク・ライフ・バランスを取り上げる理由

時間の限られたカリキュラムの中で、数ある現代的課題のすべてを扱うことは難しい。本研究でワーク・ライフ・バランスを選んだのは、次の3つの理由による。

一。学校現場でのキャリア教育は、仕事や職業について扱うことが多い。実際、「13歳のハローワーク」による職業調べ、職場体験、職業人講話、「なりたいもの」

「就きたい職業」を追求させる「夢追い」型進路指導などの試みは多いはずである。児美川（2013）は、「キャリア教育の焦点が、職業や就労だけに当たってしまっている」ことを問題視している。実際のところ、ワーク・ライフ・バランスに関する議論で示されるように、人のキャリアは仕事（ワーク）からのみ語れるものではなく、仕事以外の生活（ライフ）の側面も重要である。むしろ、ワークについて考える際に、ライフの面を無視してはならないような状況になってきている。そうした最近の事情について、学生は詳しく学ぶ機会がなかったのではないかと想定される。

二。人のキャリアを考える上で、ワーク・ライフ・バランスが重要なのであれば、子どもへのキャリア教育を考える上でも、その子が学校外でどのような生活（特に家庭生活）を送っているのかということをも前提にする必要があるだろう。概して、自分が生まれ育った家庭以外の実情を詳しく知る機会は少ない。自分の家庭以外に、多様な家庭環境があるのだと理解することで、より深くキャリア教育について考えられるようになるのではないか。また、大雑把にライフという概念を取り上げるのではなく、ワーク・ライフ・バランスにおいて重要な観点であり、ライフイベントの中でも大きな意味をもつであろう、仕事と子育ての両立という具体的なテーマおよび事例を取り上げることで、より深くキャリア（特にあまり考えることのなかったライフの側面）についての理解を深められるのではないか。

三。ワーク・ライフ・バランスについては、前述のとおり城（2014）において取り上げられている。しかし、城の実践は、講義中心のものであった。仕事と子育ての両立といった、ほとんどの学生が未経験であろうことについて、より腑に落ちるように理解してもらうためには、体験的な要素を取り入れたり、「ドーナツ論」で言うところの YOU 的他者の存在を重視したりといった、方法上の工夫がさらに必要なのではないか。

これらの理由から、ワーク・ライフ・バランスをテーマとしたカリキュラムの開発に取り組むことにした。

3. カリキュラム開発

3.1. 教育方法の工夫（子育て体験実習）

教育学部の大学生を対象として、ワーク・ライフ・バランスおよび仕事と子育ての両立にかかわる現状を伝えるとして、どのような教育方法上の工夫が可能だろうか。

今回は、子育ての一部分を実際に体験できるようなカリキュラムを構想することにした。仕事と子育ての両立ということは、ほとんどの学生にとって未経験のことであろう。だからこそ学ぶ意義があると言えるのだが、城

（2014）のような講義型授業によって一方的に話を聞くだけでは、子育ての実態に迫ろうとしているにも関わらず、抽象的な内容理解にとどまってしまうことが懸念される。リアリティある学びを目指しているのに、所詮は遠いファンタジーのような出来事だと捉えられてしまう、とも言えるだろう。また、「ドーナツ論」的に言えば、学生（I）が、YOU 世界を経ずに、他人（THEY）を聞かされるだけということになりかねない。

一方、たとえば子育て中の家庭を訪問し、子どもや親（YOU）とかかわりながらその実態について直に学ぶことができれば、子育てという本来は遠い出来事が、自分に近いものとして捉えられるのではないかと期待をすることができる。

関連して、筆者の一人である堀江が代表をつとめるスリール株式会社⁹は、「ワーク&ライフ・インターン」という子育て体験実習を事業として行っている。大学生対象のインターン・プログラムであるが、インターン先が子育て中の共働き家庭というめずらしい試みである。会社 HP においては、「働くこと」＝ワークと、「生活」＝ライフのリアルを学ぶことができるのがワーク&ライフ・インターンインターンプログラム¹⁰であり、「働きながら子育てをするパパ・ママの生活の一部を体験し、座学・交流プログラムを通じて、社会人の様々な考え方を知ること、ワークもライフも全部あわせた自分の将来を考えてみませんか？」という紹介がなされている¹⁰。具体的には、表 1 のような体験を行い、ワークとライフのバランスに奔走する共働き家庭と直に触れ合いながら、キャリアのあり方について学ぼうとするプログラムである。概ね、週に 1～2 回程度、4 ヶ月ほどの期間、家庭とかかわることになる。

16:10	4限終了後、保育園に向かう
16:30	ペアの学生と最寄駅で待ち合わせ
17:00	保育園にお迎え
17:30	ごはんの準備
18:00	みんなでご飯
19:00	遊び
19:30	お風呂
20:30	ママ帰宅 仕事と育児の両立についてお話を伺う
21:00	帰宅

表 1 体験プログラム例
スリール株式会社 HP¹¹より引用

今回は、この「ワーク&ライフ・インターン」を大学授業用にアレンジし、子育て体験実習を取り入れた全 15 回の「キャリア教育」カリキュラムを構想した（表 2）。

カリキュラムの大枠は次のようなものである。

受講生は、講義やワークショップ (WS) 型授業などをとおして、キャリア教育の現状や、子育て体験実習に必要なことを学んでいく。また、ゲストトークでは、子育て中の社会人や現職教員から、子育てやキャリア形成、キャリア教育の実態について話を聞く。

そうしたことを行いながら、途中、外部実習先にて、2 回の「ワーク&ライフ・インターン」(子育て体験実習)を行う。子育て体験実習は、学生 2 人で 1 組となり、1 つの共働き家庭を訪問する¹²。原則として平日夕方¹³、お家の方とともに保育園等へ子どもを迎えに行き、一緒に帰宅をする。その後、各家庭の日常に合わせて、お風呂に入ったり、夕食をとったり、子どもと遊んだりする。その最中や子どもの就寝後などに、適宜、親へヒアリングを行う。概ね 21:00 前には終了となる。

そして最終的には、実習で学んだことや、授業をとおして考えた今後のキャリア教育のあり方をまとめ、受講者や教員の前でプレゼンをする。子育て体験をするだけでなく、座学→体験→振り返り、という一連の流れを経ることにした。

表 2 「キャリア教育」カリキュラム

回	内容
第 1 回	オリエンテーション
第 2 回	講義①キャリア教育の概要について
第 3 回	WS①発達過程、子どもの行動、他者理解、コミュニケーションについて
第 4 回	ゲストトーク①社会人の話を聞いてみよう (子育て中の社会人による話)
第 5 回	WS②自分の軸を考える
第 6 回	WS③子育て体験実習に向けて
第 7 回	子育て体験実習①実習先の親との顔合わせ
第 8 回	子育て体験実習②ワーク&ライフ・インターン
第 9 回	※大学の授業時間ではなく、定められた期間のうち、実習先の家庭と調整の上、1 回実習を実施
第 10 回	WS④実習の振り返り ゲストトーク②社会人の話を聞いてみよう (現職教員による話)
第 11 回	子育て体験実習③ワーク&ライフ・インターン
第 12 回	※大学の授業時間ではなく、定められた期間のうち、実習先の家庭と調整の上、1 回実習を実施
第 13 回	プレゼン準備① (実習の振り返り、プレゼン準備)
第 14 回	プレゼン準備② (実習の振り返り、プレゼン準備)
第 15 回	プレゼン、まとめ

4. 授業の結果と考察

4.1. 実施概要

子育て体験実習を取り入れた全 15 回のカリキュラムを、2016 年度・前期 (4 月～8 月)・千葉大学教育学部「キャリア教育」にて実施した。1 年生以上を受講対象者とした。

千葉大学教育学部非常勤講師である筆者ら 3 名を主たる授業担当者として、一部、スリール社員による支援を得ながら授業を運営した。主に、キャリア教育の理論にかかわる部分は阿部、WS や子育て体験実習にかかわる部分は堀江とスリール社員、ゲストトークのコーディネートなど外部との交渉が必要な部分は谷山が担当したが、オムニバス型授業のように各回をそれぞれに任せきりにするのではなく、基本的には全般を共同で企画・運営した。

受講者は、35 名 (男子学生 14 名、女子学生 20 名、委託研修生 1 名¹⁴) であった。なお、人数の都合上、子育て体験実習に大学院生のティーチング・アシスタント 1 名が参加した。

4.2. 授業の様子から¹⁵

オリエンテーションでは、授業者全員が登壇し、それぞれの自己紹介¹⁶や内容紹介を行った。また、子育て体験実習へ向けて、責任感をもちつつがんばっていきましょうというメッセージを熱く伝えていった。このように複数人が登壇し、熱く語っていくような授業および導入の仕方は、当学部の他の授業ではそれほど多くないと思われる。

学生の反応は、目に見えて良いと思われるようなものではなかったが、最終回の感想用紙には「キャリア教育を初めて受けたときに、まずとても講師の方々께서きらきらと輝いているように見えて [中略] この授業を受けたら自分の中で何か変えることができる、成長につながるかもしれないと思った」(女子) と書いている学生がいた。概ね、肯定的な印象を与えることになっていたようである。子育て体験という新しい試みに挑戦しようという授業であったが、その試みに向かう意欲は高められたのではないかと推察される。

また、別の者の感想に、「この授業は普段受けている大学の授業とは少しちがっていたのしかったです」(女子)、「普通の大学の授業じゃ学べないことを学べたと思いました」(男子) とあるように、授業者らの見込みのおおりの、他の授業とは異なった雰囲気での授業だと捉えられていた面があったようだ。そうした雰囲気や進め方に対して、「はじめは正直とまどうことばかりでどうなるかと思うこともありましたが、大学生にとって求められる必要な講義であると思います」(女子) という感想もあった。異なる様子に戸惑いを感じる者もいたようだが、後に取り上げるように、最終的にはみな自分なりに様々なことを学べたと語っていた。

その後の授業でも総じて反応は大きくはなかったが、

授業中の様子を見る限り、講義やWSに対して学生らは真摯に取り組んでいるように、授業者らには思われた。

また、学生らの反応は薄いものの、授業者らのうち特に堀江やスリール社員は、積極的に学生とコンタクトをとりながら、丁寧に指示を出したり、明るく励ましたりしていった。途中、子育て体験実習へ向けての不安を語る学生もいたが、こうしたかかわり方の影響もあってか、無事に実習に向かい、終えることができていた。こうしたスリール関係者の丁寧で明るいかかわりがあったことは、本授業の特徴であるように思われた。

授業全体としては、内容のレベルとしても進め方としても、大きな問題が生じることはなく、授業を進めることができていた。

4.3. 子育て体験実習と最終プレゼンから

子育て体験実習として、実習先の親との顔合わせを1回、実際の「ワーク&ライフ・インターン」を2回行った。家庭とのかかわりや、遅刻・欠席、その他の点についても問題なく、また事故も起こることなく、全グループ無事に実習を終えることができていた¹⁷⁾。

そして授業の最後には、子育て体験実習で学んだことや、授業をとおして考えた今後のキャリア教育のあり方についてグループごとにまとめ、受講者や教員の前でプレゼンをするということを行った。学生の体験やそこで学んだことの一端は、このプレゼン内容に現れているはずである。

まず、どのグループも、表2で示したような「ワーク&ライフ・インターン」の一連の流れを体験できていた。夕方に子どもを迎えに行ったり家族と合流したりした後、夕食や交流をして、その前後で親へのヒアリングを行っていた。

あるグループは、この体験から気づいたこととして、「共働きでも余裕がある」「親と子のお互いの協力があって初めて「子育て」が成り立つ」「子育てをするために何かを削るのではなく自分のしたいことをして、子育てもできる」(図2)、またあるグループは、「夫婦の対話が重要」「企業が子育てを考えている」といったことを挙げていた(図3)。このように、どのグループも、「仕事と子育ての両立が大事」という一面的な文言ではなく、そこから一步踏み込んだ具体的な内容が発表されており、各家庭と直に触れ合い、具体的な話を聞くということができていたのだと解される。ワーク・ライフ・バランスの実態について、各家庭の考え方に応じた工夫や努力があることや、勤める企業との関係などについて学んだようである。

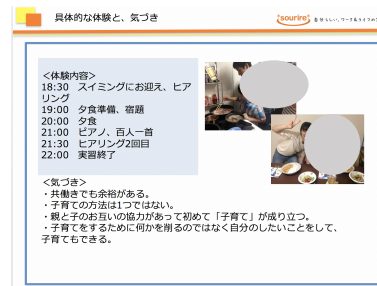


図2 学生のプレゼン資料A

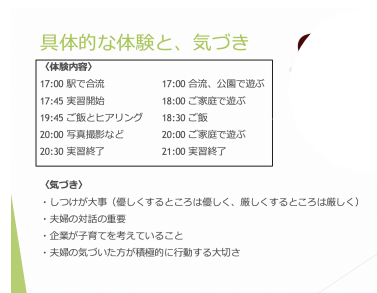


図3 学生のプレゼン資料B

また、体験や授業全体をとおしてキャリア教育に関して考えたこととして、あるグループは、「自分たちが受けてきたキャリア教育では、職業のことばかり扱われ、実際の生活が見えないが、もっと自分が「何になりたいか」という人生・生活の根本からキャリアを考えていくことが大事だ」といった内容のことを発表していた(図4)。またあるグループは、「キャリア教育とは、職業観だけでなく、人生観も含めた相互教育だ」といった内容のことを発表していた(図5)。本授業では、既存のキャリア教育を批判的に検討しつつ、ワークだけでなくライフの面の重要性についても考えられるようになることをねらいとしていたが、どのグループもそうした点について自分たちなりに考えての発表を行うことができていたことが分かる。

私たちが受けてきたキャリア教育は...

- ・大人＝職業(職業体験、職業講話)
- ・将来の夢を考えさせる

→学んだことは職業のことばかり
実際の生活が見えない

「何になりたいか」

図4 学生のプレゼン資料C

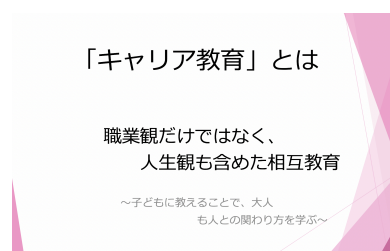


図5 学生のプレゼン資料 D

4.4. 事後アンケートから

全授業終了後に行った事後アンケートの結果もみてみよう。Google ドライブを活用し、インターネット経由で収集をした。ただし、大学生 34 名中、19 名からしか回答を得ることができなかつたため、限定的な範囲での考察になる。

質問項目「学校でどのようなキャリア教育が行われているか説明できる」には、「とてもそう思う」4 名、「まあまあそう思う」14 名、「そう思わない」1 名という結果であった。本授業では、単に子育て体験を行うだけでなく、既存のキャリア教育について批判的に考えられるようになることも目指していた。そのため、キャリア教育に関する講義なども行っていたが、学生の回答からすると、否定的な回答は少なく、既存のキャリア教育についてもある程度の理解はしてもらえたと思われる。

質問項目「キャリア教育では、働くということだけでなく、子育てなど私生活の面についても扱う必要があると思う」には、「とてもそう思う」13 名、「まあまあそう思う」6 名、「そう思わない」0 名という結果であった。肯定的な結果が多く、本授業でねらいとしたライフの面の扱いについて学ぶことができていたのだと思われる。

質問項目「子育てをテーマとしたキャリア教育を行うときに、どのような授業を行えばいいかイメージができる」には、「とてもそう思う」1 名、「まあまあそう思う」17 名、「そう思わない」1 名という結果であった。この項目についても、否定的な回答は少なかった。

ただし、最終プレゼンにおいて学生らはキャリア教育の具体的なプランを提案していたが、「自分の将来像を考える」という授業や、「親が子供に頃にはなかった仕事を考える」という授業など、ワーク・ライフ・バランスとの関連が論じきれていないものが多く、またプレゼンの準備・実施時間の都合でもあるのだが、具体性に欠けるプランしか提案することができていなかった。子育て体験実習の経験を、どのように学校現場でのキャリア教育と結びつけて考えるべきなのか、全体のカリキュラムの中でももう少し丁寧に扱う必要があるかもしれない。

4.5. 本授業への感想から

次に、授業最終回に書いてもらった本授業を受講しての感想をいくつか部分的に取り上げる。

- ① 実習、座学の全授業を通してこれまでそこまで真剣に考えることのなかった子育て、結婚について考えることができた。〔中略〕自分が教師になったときワークに限らない、さまざまなことに焦点をあてたキャリア教育を行えるようにしたい (男子)
- ② これまで受けてきたキャリア教育に対する視点に変化し、これまでのキャリア教育に不足しているもの、将来のキャリア教育には何が必要なのかを学ぶことができ、それをどのように授業で活用していくのかをしっかりと考えることができた (男子)
- ③ ガイダンスを受けた 4 月と比べて、自分が今までに抱いていたキャリア教育の概念が全く違うものに変化したと感じています。職業選択の手段だけとしてではなく、自分の生き方について考えていくことがキャリア教育であり、我々教師を目指す人間がこれから深く考えていかななくてはならないことだと感じさせられました。 (男子)
- ④ 10 人 10 色であることは、実際に観て実感しないと分からないことだともいいました (女子)
- ⑤ 自分と全く違う生活スタイルに触れることができたことはとても大きかったです。 (男子)
- ⑥ 一般のご家庭に何うということは、何かきっかけが無いとできないことなので、その機会になり、自分の将来を考える上でも大きなきっかけとなりました。最初は時間割の関係で取ったのですが、とても人生にプラスになりました。後輩にもすすめたいです。 (女子)
- ⑦ この経験をもとにもっと自分の将来ときちんと向き合い、自信を持って目標に向かおうと思いません (女子)
- ⑧ キャリア教育で学んだことを自分の人生設計に生かせるようにしたい (女子)
- ⑨ 楽しかったが、大変だった。 (男子)
- ⑩ ワークショップのときの説明を詳しくすること。また、時間的に余裕をもって進めてほしい。 (男子)

①②③には、子育て体験実習などをとおして、既存のキャリア教育を批判的に捉えるという本授業のねらいに応じた内容が記されている。こうした記述からは、授業者らが想定したねらいが概ね達成されたことが窺える。

④⑤には、子育て体験実習に注目した内容が記されて

いる。子育て体験実習から、それぞれが様々なことを感じたのだと分かる。

⑥⑦⑧は、学校現場のキャリア教育というよりは、自分自身のキャリアについて示唆が得られたことを示す記述である。主たる授業のねらいは、学校現場のキャリア教育について考えることであったが、副次的に学生自身のキャリア形成にも影響を与える授業であったことが窺える。

他に⑨のような記述からは、大学の一授業としては外部実習の回数も多く、そこでの責任も大きく、学生にとって文字通り「大変」な授業であったことが窺える。他方で、ここまでみてきたように、大変であるからこそその意義もあるはずである。本授業は必修授業ではないため、シラバスや初回授業でのオリエンテーションで、受講希望者に対して適切に内容を伝えることが重要であろう。

また、⑩のように授業の課題として捉えられる感想が1件あった。確かに、⑩で言われるように、体験へ向けて様々な準備をしておきたいため、1コマに内容を盛り込みすぎたところがあり、授業時間を少し延長してしまうことも数回あった。時間に限りのある大学授業として、細部にわたりカリキュラムを精練させていくことは、今後の課題である。

4.6. その他の観点 (YOU 的かかわり)

最終回には、「ワーク&ライフ・インターン」に協力してくれたいくつかの家庭が、学生のプレゼンを聞きに来てくれた。プレゼンの前後に、学生と楽しげに話をしている様子も見られた。先に、子育てと仕事の両立という学生にとって遠い世界 (THEY) の話に実感をもつためには、YOU 的他者とのかかわりが重要ではないかと考えたが、こうした様子を見ていると、各家庭の方々が、学生 (I) にとっての YOU 的他者としてかかわってくれたのだとみることもできる。

さらに、YOU 的かかわりという観点からすると、先にも挙げたスリール社員のふるまいやかかわり方も、子育て体験という未知の課題へ向かう学生にとっては、YOU 的かかわりであったのではないかと考えることもできる。授業者は、単にキャリア教育やワーク・ライフ・バランスに関することを伝達するという役割を担うだけでなく、初めて THEY へ向かおうとする I に対する YOU として存在することも重要であり、今回はそのことが有効に機能したと推察される。

5. 成果と課題

本研究では、将来のキャリア教育の担い手を育成する上で、ワーク・ライフ・バランスを題材とした教員養成系学部授業「キャリア教育」のカリキュラム開発と実施

を試みた。具体的には、子育て体験実習を取り入れた授業を展開したが、そうした体験を中心とした授業が学生それぞれにとって意義があったことが示唆された。また、「学びのドーナツ論」をたよりにすると、THEY 世界について学ぼうとする学生 I にとって、様々な YOU 的かかわりをもつことが有効なのではないかという仮説も導かれた。

今後は、今回の試みを基盤として、カリキュラムを精練することや、子育て体験そのものの意義を追うことなどを重ね、よりよい「キャリア教育」のあり方を探っていくことが課題となる。また、より広い視野から考えると、こうした試みを現場でのキャリア教育にどう関連付けていくかを探っていくことが必要となるだろう。

¹ たとえば、松尾 (2015)、大野 (2016)、新 (2016) を参照。

² たとえば、2016 年、認可保育所入所に落選した母親と思われる人物がブログに「保育園落ちた。日本死ね！」書いて注目を集め、待機児童問題に関する議論が巻き起こった。以下の記事を参照。

「保育園落ちた、今年も SNS に悲痛な声「泣けてくる」」 (朝日新聞 DIGITAL)

<http://www.asahi.com/articles/ASK235WFRK23ULZU007.html> (閲覧日 2017 年 2 月 14 日)

また、2016 年、大手広告代理店の株式会社電通の社員が過労自殺した事件が起こり、就労のあり方について議論が巻き起こった。以下の記事を参照。

「電通は変わるのか 過労自殺対策、社内飲み会も見直し」 (朝日新聞 DIGITAL)

<http://www.asahi.com/articles/ASK1S5DVPK1SULFA02H.html> (閲覧日 2017 年 2 月 14 日)

³ キャリア教育のことである。

⁴ たとえば、「コミュニケーション力がある」のだとしても、10 年前に求められていたコミュニケーション力と、10 年後に求められるであろうコミュニケーション力には、相違点もあるはずである。自己の個性を理解するにしても、社会の状況と切り離してそれを評価することは難しいのではないかと。

⁵ 佐伯の話をつまえると、人だけでなく、モノや教材などと YOU 的なかかわりをもつこともありうるが、ここではそこまで踏み込まないことにする。

⁶ 教員養成系学部等におけるキャリア教育に関しては、次のような試みが報告されている。

河崎・岩本・仲川 (2011) は、教員養成系大学 (奈良教育大学) において、ボランティアを中心としたキャリア教育プログラムを開発したと報告している。ボランティア活動は、かねてよりキャリア教育の重要な要素であったにもかかわらず、その扱い方については詳しく検討がなされてこなかったという問題意識による取り組みである。ボランティアという活動の扱い方を検討したものであるが、報告においては、主たるねらいが将来のキャリア教育の担い手を育成することなのか、学生の意識や資質の向上なのか、厳密には示されておらず理解が難しい。また、従来からあったボランティアの価値や意義を再検討しようとする試みであり、本研究の方向性とは異なったものと位置づけられる。

松本 (2013) は、教員養成系大学において、教職というキャリアをテーマとして扱った授業を実践し、その試みが大学での学習への動機づけに与える影響について報告している。学生自身に対するキャリア教育の一つであると言える。将来のキャリア教育の担い手を育成することは主眼にはされていない。

その他、進路指導に関する科目でキャリア教育について扱っている大学は少なくない。たとえば、愛知教育大学の 2016 年

度のシラバスを参照すると、「進路指導概論」において、職業指導からキャリア教育に至るまでの歴史や、小・中学校におけるキャリア教育の実践例が教えられているようである。しかし、新たな教育内容を検討しようとする本研究とは方向性が異なるものである。

7 内閣府「仕事と生活の調和の実現に向けて」

<http://www.cao.go.jp/wlb/towa/definition.html> (閲覧日 2017年2月14日)

8 たとえば、佐藤・武石 (2011) を参照。

9 スリール株式会社 <http://sourire-heart.com/> (閲覧日 2017年2月14日)

10 詳しくは次のページを参照。

<http://sourire-heart.com/service/intern> (閲覧日 2017年2月14日)

11 <http://sourire-heart.com/service/intern> (閲覧日 2017年2月14日)

12 訪問先家庭として、スリールとつながりのある家庭に協力いただいた。なお、学生のスケジュールや住まい、訪問先家庭の場所などを考慮し、学生と家庭のマッチングは、授業者側で行った。

13 各家庭の都合に応じて、休日や昼間に実施した場合もある。

14 教育委員会より研修のため派遣されている現職の中学校教員であった。

15 本節の内容は、主に阿部によるメモ（授業中のメモや、授業者らによる意見交換のメモ）をもとに記している。

16 それぞれが、非常勤講師以外に様々な立場であるため、そうした内容を伝えていった。このように、専任教員以外の多様な立場をもつ者たちが一同に集う授業も多くはないはずだ。

17 ただし、実習前にご挨拶のメールを送るよう指示していたのだが、それを忘れた者がいた。

参考文献

愛知教育大学 2016 年度シラバス「進路指導概論」

http://moon.ics.aichi-edu.ac.jp/syllabus/disp.php?jugyo_code=2413351 (閲覧日 2017年2月14日)

荒川葉 (2009) 『「夢追い」型進路形成の功罪—高校改革の社会学—』東信堂

新清士 (2016) 『VR ビジネスの衝撃—「仮想世界」が巨大マネーを生む—』NHK 出版

大野治 (2016) 『IoT で激変する日本型製造業ビジネスモデル』日刊工業新聞社

河崎智恵・岩本廣美・仲川元庸 (2011) 「教員養成系大学におけるボランティアを核としたキャリア教育の実践」、奈良教育大学教職大学院研究紀要「学校教育実践研究」、第3巻、pp.21-28

玄田有史・曲沼美恵 (2004) 『ニート—フリーターでも失業者でもなく—』幻冬舎

小池翔太・福嶋俊・藤川大祐 (2013) 「デジタル時代の働き方に着目した教員養成学部における「キャリア教育」の試み」、授業実践開発研究、第6巻、pp.7-16

駒崎弘樹 (2009) 『働き方革命—あなたが今日から日本を変える方法—』筑摩書房

児美川孝一郎 (2013) 『キャリア教育のウソ』筑摩書房

小室淑恵 (2010) 『改訂版 ワークライフバランス—考え方と導入法—』日本能率協会マネジメントセンター

佐伯胖 (1995) 『「学ぶ」ということの意味』岩波書店

佐藤博樹・武石恵美子 (2011) 『ワーク・ライフ・バランスと働き方改革』勁草書房

城亜美 (2014) 「中高生のキャリア教育におけるワーク・ライフ・バランスの扱いの検討」、授業実践開発研究、第7巻、pp.33-41

中央教育審議会 (1999) 「今後の初等中等教育と高等教育の接続の改善について (答申)」

中央教育審議会 (2011) 「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について (答申)」

出口治明・駒崎弘樹 (2016) 『世界一子どもを育てやすい国に

しよう』ウェッジ

松尾豊 (2015) 『人工知能は人間を超えるか—ディープラーニングの先にあるもの—』KADOKAWA

松本浩司 (2013) 「教員養成大学におけるキャリア教育が大学での学習の動機づけに与える効果に関する実践的研究—「教職の意義等に関する科目」におけるキャリアデザイン取り組み—」、名古屋学院大学論集、pp.59-70

三浦展 (2005) 『仕事をしなければ、自分は見つからない。—フリーター世代の生きる道—』晶文社

無藤隆・北野幸子・矢藤誠慈郎 (2014) 『認定こども園の時代—子どもの未来のための新制度理解とこれからの戦略 48—』ひかりのくに

文部科学省 (2011a) 『小学校キャリア教育の手引き<改訂版>』教育出版

文部科学省 (2011b) 『中学校キャリア教育の手引き』教育出版

ファザーリング・ジャパン (2013) 『新しいパパの教科書』学研マーケティング

藤川大祐 (2006) 「まだ問題が多い「キャリア教育」、藤川大祐編・NPO 法人企業教育研究会著『企業とつくるキャリア教育』教育同人社 pp.18-24

藤川大祐・塩田真吾 (2007) 「教員養成学部における「キャリア教育」授業の試み」、千葉大学教育学部研究紀要、第55巻、pp.29-35

古市憲寿 (2015) 『保育園義務教育化』小学館

謝辞

学生の実習を受け入れてくださったご家庭の皆様に、深く感謝を申し上げます。